

フィールドワーク新企画「発見!水の文化」が好評です!

ミツカン水の文化センターが2017年度からスタートした「発見!水の文化」。従来の「里川文化塾」に比べてより身近で気軽な企画としたフィールドワークです。第3回「船でめぐる東京の水辺～江東の内部河川編～」と第5回「江戸の水辺街歩き(深川編)」の様子をご紹介します。(残念ながら第4回は台風の影響で中止)週末の昼下がり、しかも比較的短い時間ということもあって、幅広い年齢層の方々にご参加いただきました。2018年度の「発見!水の文化」にもぜひご期待ください! <http://www.mizu.gr.jp/hakken/houkoku/>

Webで公開中!

第3回 船でめぐる東京の水辺 ～江東の内部河川編～

—2017年9月23日(土) 13:00～16:30

講師: 高松 巖 (たかまつ・いわお) さん 一般社団法人 まちふね みらい塾 代表理事
阿部 彰 (あべ・あきら) さん 一般社団法人 まちふね みらい塾 専務理事



旧中川のクルーズ風景

開放感あふれるオープンデッキ型の観光船に乗って、日本橋川から神田川、そして隅田川を経て江東区の内部河川を巡り日本橋に戻るというロングクルーズを体験しました。

もちろん、ただ眺めるだけではありません。講師の阿部さんと高松さんから江戸時代の名残、現在の様子、そしてこれからの水辺の可能性についてさまざまなお話をお聞きし、水辺と人の暮らしについて考えました。



日本橋観光棧橋にて



橋の上の人たちと手を振り合う



第5回 江戸の水辺街歩き(深川編)

—2017年11月12日(日) 13:00～16:30

講師: 斎藤 善之 (さいとう・よしゆき) さん 東北学院大学経営学部 教授



万年橋を渡る参加者

好評だった第1回「日本橋編」に続き、講師に斎藤善之さんをお招きして「江戸の水辺街歩き～深川編～」を開催しました。

江戸時代に埋め立てが進んだエリア「深川」は幕府の船庫が置かれたり、物流のターミナルになったりと、さまざまな役割を果たしていました。往時の面影はないところもありますが、専門家の解説を聞き、江戸時代の風景を想像しながら、今に引き継がれる「水の文化」を再発見しました。

参加者の声

「こんなにしっかりしたレジュメをいただけたと思っていなかった。。後で振り返りながら再度今回のルートを巡ってみたいと思います!」(女性 20代)
「多くのガイドツアーに参加しているが、ここまで内容の濃いツアーは初めて!」(男性 70代)



新大橋で説明する斎藤先生



深川発祥の地「深川神明宮」



今は公園となっている干鯨場跡



水の文化 Information

■「水の文化」に関する情報をお寄せください

本誌「水の文化」では、今後も引き続き「人と水のかかわり」に焦点をあてた活動や調査・研究などを紹介していきます。

ユニークな水の文化楽習活動や、「水の文化」にかかわる地域に根ざした調査や研究がありましたら、自薦・他薦を問いませんので、事務局まで情報をお寄せください。

■ホームページのお問い合わせ欄をご利用ください。

<http://www.mizu.gr.jp/>

■水の文化 バックナンバーをホームページで

本誌はホームページからPDFファイルとしてダウンロードできるほか、冊子をご希望の方はホームページの「最新号のお申し込みボタン」からお申し込みいただけます。どうぞご利用ください。

■里川文化塾レポート詳細版は、ホームページで

里川文化塾のレポート詳細版は、参加できなかった方も楽しめる内容です。また、今後の「発見!水の文化」についても、順次ホームページでご案内します。ご注目ください。

皆さまの感想をお待ちしています!

『水の文化』58号について、アンケートにご協力ください。
今後の機関誌をよりよくしていくための参考にさせていただきます。

◆アンケートへの回答はこちらから。

<http://www.mizu.gr.jp/form58.html>



※アンケート用紙をお持ちの方は、FAXまたはメールにて下記へご返信いただく形でも結構です。

FAX: 03-3297-8578

メールアドレス: tokyo-office@mizu.gr.jp

編集後記

「拭く」特集を組む上でイタリア人の同僚と話をして驚いた。鉛で指がべとべとになったとき、彼女は水で洗えない場合は乾いた布や紙で拭くという。それに對して私は絶対に湿った布や紙で拭きたいと感じた。水がなければすっきりと落ちないし、綺麗にならないと思うからだ。一方彼女は、含まれる水分がどんなものか分からない。却って汚れるかもしれないと感じて気持ちが悪いそうだ。綺麗にするには、湿ったもので拭くのがベストとの自分の中にある感覚の由来が、今回取材を進め腹に落ちた。そして綺麗な水で、存分に拭けることの幸せ……。意外な所から水の恵みを感じる企画であった。(松)

去年9月から水の文化センターの担当になりましたジョージ(イギリス出身)です。今回のテーマが選ばれた時に、実を言うと「拭く」なんていったい何が面白いんだろうかと、かなり戸惑いました。しかし、初めて取材に行き、鈴木先生がおっしゃった「今という時間、ここという場所」の大切さにとっても共感を覚えました。拭くという行為は色んな面で意外な役割を果たしているのだと考えさせられよい経験になりました。今後も水の文化センターでこのような発見に巡り合えば嬉しいなと思っています! よろしくお願いたします。(FG)

テーマを見た時、人が汚れや「水を」拭くのだから、とても「水の文化」らしいと思った。けれど、この取材で日本人特有の文化だったのは、むしろ「水で」拭く行為だとわかった。これからは拭き掃除が少し楽しくなりそうだ。(原)

公衆トイレにハンドドライヤーが設置されて久しいが、ハンカチやタオルを忘れたとき以外は使用しない。実際には乾いているけど何か物足りないというか、違和感が残るからだ。それも「触覚」の話聞いて納得した。「拭く」というのが身近な行為すぎて無意識だったが、新たな発見に感謝。(力)

時折、仕事場のガラス窓を拭く。太陽の光がきれいに差し込み、気分が晴れ晴れとするからだ。滞りがちな原稿書きも、窓を拭いたあとは多少はかどる気がする。いまインバウンドが活発になり、寺院で座禅や雑巾がけを体験する外国人観光客が増えていて、なかには靴を脱ぐ生活の快適さに気づく人もいるとのこと。とすれば、何世代かあとには家に帰ったら靴を脱ぎ、床を拭く生活が世界各地に広がっているかもしれない……と夢想する前に、まずは自分の次の世代に、拭くことの意義や習慣を伝えようと思う。(前)

ミツカン水の文化センター機関誌

水の文化 第58号

ホームページアドレス

<http://www.mizu.gr.jp/>

発行

ミツカン水の文化センター

〒104-0033 東京都中央区新川 1-22-15 茅場町中埜ビル 4F

株式会社 Mizkan Partners

Tel. 03 (3555) 2607 Fax. 03 (3297) 8578

発行日

2018年(平成30)2月

企画協力 (氏名50音順)

沖 大幹 東京大学生産技術研究所教授

古賀邦雄 水・河川・湖沼関係文献研究会

陣内秀信 法政大学教授

鳥越皓之 大手前大学学長

中庭光彦 多摩大学教授

制作

松本裕佳

Fleminger George

青木広実

小林夕夏

原田朱野

吉田奈保子

編集製作

前川太郎 編集

中野公力 デザイン・撮影

蔵田 豊 デザイン

執筆

秋山健一郎 (pp.32-34)

佐々木 聖 (pp.6-9, pp.22-23)

手塚ひとみ (pp.10-13, pp.18-21)

開 洋美 (pp.42-44)

前川太郎 (pp.14-17, pp.24-31)

撮影

大平正美 (pp.10-11, pp.28-31, pp.42-44)

葛西亜理沙 (pp.22-23)

川本聖哉 (pp.3-5, pp.18-21, p.23, p.32)

鈴木拓也 (pp.11-12, p.18, p.33)

中野公力 (p.7, pp.24-27)

藤牧徹也 (pp.14-17, pp.38-41, pp.45-49)

描画

朝生ゆりこ (p.13)

印刷

中埜総合印刷株式会社